

ブルネイ博物館におけるイスラーム美術展示

鎌田 由美子

はじめに

ボルネオ島北岸に位置するブルネイ・ダルサラーム国（通称ブルネイ）は、1984年にイギリスから独立した立憲君主制のイスラーム国である。国土の大きさは三重県ほどしかないが、石油や天然ガスが豊富なため、歳入が多く、国王スルタン・ハサナル・ボルキア（1946年生、位 1967—現在）は世界有数の富豪として名を馳せている。国民の所得水準も高く、社会保障が整っており、教育費・医療費は無料で、所得税もかからない。国民の半数が公務員である反面、さまざまな分野が出稼ぎを含む外国人労働者に支えられている⁽¹⁾。「豊かな国・ブルネイ」のイメージは、ブルネイの出版物をはじめ、様々なところで喧伝されている。2004年にシンガポールで出版された『東南アジアの美術館』では、ブルネイ博物館のイスラーム美術展示は高く評価されており⁽²⁾、豊かな資金をもとに優れた博物館が運営されていることが想像された。

筆者は、イスラーム美術史研究においては十分に調査・研究のなされていない東方アジアのイスラーム美術の発展・受容・コレクション形成の実態を探る目的で、2011年にマレーシア・イスラーム美術館（以下 IAMM）を、2012年にシンガポールのアジア文明博物館（以下 ACM）を訪れ、そのイスラーム美術展示の特徴を考察した⁽³⁾。それらと比較した場合に、ブルネイのイスラーム美術展示にはどのような特徴があるのか、どのような意図のもとにイスラーム美術品が収集され、展示されているのかを調査するため、2013年7月に首都バンダル・スリ・ブガワンを訪れた。

しかしながら、ブルネイ博物館のイスラーム美術展示は、上に触れたようなイメージとは必ずしもそぐわないものであった。展示品のキャプションは不十分で、展示ケースの電気が切れているものもあ

り、一部の美術品は埃をかぶったまま、展示ケースにも入れられずに所狭しと並べられていたからである。本稿では、ブルネイの歴史をイスラームとの関わりから概観したあと、ブルネイ博物館の設立の経緯、イスラーム美術ギャラリーの成り立ちとその特徴について述べる。最後に、なぜ、ブルネイ博物館のイスラーム美術展示が現状のようになってしまったのかについて考察する。

1. ブルネイの歴史

ブルネイには現存する文書が少ないため、石碑や墓碑のほか⁽⁴⁾、中国の歴史書や、東南アジアを訪れたヨーロッパの人々の書き残した記録などを主に用いて、歴史記述がなされている。1970年には دونالد・ブラウンがブルネイの歴史・社会・文化についてのモノグラフを出版した⁽⁵⁾。1975年、ロバート・ニコルは、16世紀から17世紀初めにかけてヨーロッパの人々の書き残した史料のなかから、当時のブルネイに関する記述を集めて出版した⁽⁶⁾。どちらも、ブルネイ博物館から出版されており、ブルネイ政府の歴史編纂への意欲が感じられる。しかし、欧米の研究者がブルネイの歴史を記述することに対しては反発もあったようである。1994年にオクスフォード大学出版より『ブルネイの歴史』を出版したグラハム・サウンダースは、序文において、西洋の手法を用いてブルネイの歴史編纂を行おうとする人々と、ブルネイとその支配者の名声を高めることをも目的とするブルネイ人の歴史家の間に対立が見られたと述べている⁽⁷⁾。

ブルネイ人研究者によって書かれたものとしては、1990年にムハンマド・ジャミル・アル・スフリによって書かれ、先代のスルタンに捧げられた『ブルネイの古代史：古代とイスラーム教の発展』がある。これは、ブルネイ政府によって出版されたもので、マレー語で書かれているが、日本ブルネイ

友好協会の鷺見正氏によって日本語に翻訳されている⁽⁸⁾。著者はイギリスとアメリカで教育を受けており、欧米のブルネイ史研究者の成果も取り入れつつ、ブルネイや近隣の地域に伝わる伝承や物語も多用しながら歴史を記述している点が、欧米の研究者と異なる。そのほか、マラヤ大学のジャツワン・シドゥフによる『ブルネイ歴史事典』には、ブルネイ史の概説や、ブルネイに関する文献案内も収録されており、便利である⁽⁹⁾。

ブルネイは海上交易によって栄え、その位置から、東南アジアの他地域や中国とのかかわりが強い。6-7世紀には唐代の中国に朝貢する一方、スマトラ島のシュリーヴジャヤ王国ともつながりを持った⁽¹⁰⁾。シュリーヴジャヤ王国が弱体化すると、14世紀なかばにはジャワのマジャパヒト王国に臣従する⁽¹¹⁾。中国の史書に「婆利」と表記される、研究者によってはブルネイとも考えられる地域の人々が、6-7世紀にかけて隋、唐に朝貢したことが記されている⁽¹²⁾。10世紀には、宋代の史書に「勃泥」と記されるブルネイと考えられている王国が、中国に朝貢している⁽¹³⁾。1371年には、明代の中国に使節を派遣したとされる⁽¹⁴⁾。1408年には、ブルネイ王自ら中国を訪れ、永楽帝に謁見し歓待されたが、その地で没したため、南京郊外に「勃泥国王墓」が残されている⁽¹⁵⁾。中国や東南アジア諸国との海上交易を反映して、ブルネイの遺跡からは、タイや宋代・明代の陶磁器が出土しているほか⁽¹⁶⁾、ブルネイの沈没船からは15-16世紀のヴェトナム陶磁が見つかっている⁽¹⁷⁾。

ブルネイがいつイスラーム化し、イスラーム王国となったのかについては諸説ある。9世紀までにはムスリム商人が東南アジアや中国にも進出していたので、彼らのなかにはブルネイを訪れる者もいたはずである。サウンダースは、1264年の年記入りの中国人ムスリムの墓がブルネイに残ることなどから、13世紀までにはムスリムがブルネイに存在しており、15世紀にはイスラームが影響力を強めたのではないかと推測している⁽¹⁸⁾。

ブルネイの歴史編纂を行っているブルネイ歴史センターは、ブルネイ王家の系図を各スルタンの治世とともに出版しており、それによれば、初代のスルタン・ムハンマドの治世は1363年から1402年とされているが、実際には、初代から7代までのスルタンの治世を示す確たる証拠は存在しないとい

う⁽¹⁹⁾。初期のスルタンの治世が不明であるばかりでなく、現在のスルタンにつながるブルネイ王家の人々が、いつイスラーム教に改宗したのか、正確にはわからないようである。サウンダースによれば、ブルネイ人の研究者の一部は、ブルネイ王家の改宗を14世紀にまで遡らせようとしているほか、ブルネイ歴史センターも、ブルネイの支配者の改宗をできるだけ早い時期に設定しようとしている⁽²⁰⁾。

いずれにせよ、16世紀半ばから後半にかけてブルネイは強力なイスラーム王国であり、近隣のスルーやフィリピンにまで影響力を持っていた⁽²¹⁾。第5代のスルタン・ボルキア（位1485-1524とされる）の時代にブルネイは最盛期を迎えたとされ、かつての都コタ・バトゥの地には、彼の墓と信じられている墓廟がある⁽²²⁾。この旧都コタ・バトゥからは、中国やタイの陶磁器の破片が大量に出土しているほか、中国やイスラーム圏のコインも出土している⁽²³⁾。

その後、16世紀には東南アジアに進出してきたポルトガルやスペインと対立し⁽²⁴⁾、17世紀にはさらにオランダが東南アジアに進出するなか、徐々に衰退し、17-18世紀にかけてのブルネイの情報はあまり残っていない。18世紀後半になると、七年戦争中の1762年にイギリスがマニラを占領したことをきっかけに、イギリスがボルネオ北部に関心を持つようになる⁽²⁵⁾。ジェームズ・ブルック（1803-1868）などのイギリス人勢力によってブルネイの領土の多



図1 ジャメ・アスル・ハサナル・ボルキア・モスク、筆者撮影



図2 スルタン・オマール・アリ・サイフッディン・モスク、筆者撮影

くが奪われ、1888年にはイギリスの保護下に置かれた。第2次世界大戦中の日本領時代を経て、再びイギリスの保護領となり、その後、比較的近年、1984年になって独立した。1990年には、現スルタンであるハサナル・ボルキアは自らの44歳の誕生日に、ブルネイが「マレー・イスラーム王制」であることを宣言し、1992年には即位25年を記念して、イスラーム君主であることを示すかのように自らの名前を冠した巨大なモスク、ジャメ・アスル・ハサナル・ボルキア・モスクを建設した(図1)²⁶⁾。このモスクも、先代のスルタンのモスク同様(図2)、ブルネイがイスラーム国であることと、その経済的な豊かさを誇示するかのように市内に聳えている。

2. ブルネイ博物館の設立

ブルネイ博物館は、政府のもとに1965年に組織され、1972年に現在の建物が完成した。当時、学芸員を務めたシャリフッディンのレポートによれば²⁷⁾、彼自身は博物館に関してイギリスで教育を受けたほか、1969年からアシスタント・キュレーターとして従事した人物も博物館についてイギリスで教育を受けている。また1965年からリサーチ・アシスタントとして博物館に加わった人物はその後、ハワイのビショップ博物館で教育を受けており、設立当初の職員が、欧米の博物館学を摂取しようとしていたことが分かる。そのほか、マレーシアのサラワク博物館やマレーシア国立博物館で研修を受けた職員もいた²⁸⁾。1965年から70年にかけて、国内外から所蔵品を収集し、1972年にエリザベス2世の臨

席のもと、開館した。当初は1階に「1.狩猟・漁業」「2.地質学と技術(主に石油採取の技術)」「3.自然史」、2階に「4.ブルネイの民族誌」「5.陶磁器ギャラリー」「6.村落生活」の合計6つのギャラリーから成り立っており、ギャラリー3～6についてはマレー語と英語表記のガイドブックが販売された。さらに、1969年からは『ブルネイ博物館ジャーナル』ほか、ブルネイの歴史についてのモノグラフも出版された²⁹⁾。

1970年にシャリフッディンは、ブルネイ博物館が研究・教育施設として機能するためには包括的なコレクションが必要だが、ブルネイ国内では古い文物が失われているために収集活動が困難であり、国外から購入するほうが容易であると述べている³⁰⁾。彼は、1973年の時点で、ブルネイ博物館の特色のあるコレクションとして、金工品と陶磁器を挙げている³¹⁾。1977年にフィリピンのミンダナオ大学から出版された、東南アジアの博物館の比較研究についてのレポートでは、ブルネイ博物館は、「最も急速に発展している」博物館として高く評価され、4名の学芸員と4名の職員の名前が挙げられている³²⁾。そして、ブルネイ政府は、ブルネイの文化・科学・歴史の重要中心拠点として博物館が急速に発展するために最大の援助を行っていることと述べ、陶磁器と、大砲を含む金工品のコレクションが特に充実していると指摘している³³⁾。その後の博物館の様子を知ることができないが、1980年代の『ブルネイ博物館ジャーナル』の内容を見る限り、順調に発掘・収集・研究がなされていたようである。

3. イスラーム美術ギャラリーの開設

その後、1990年に、スルタン・ハサナル・ボルキアの44歳の誕生日を記念して、ブルネイ博物館にイスラーム美術ギャラリーが加えられた(図3)。その経緯は、ナーセル・ハリリーによる『ブルネイ博物館のイスラーム美術』に詳しい³⁴⁾。それによれば、世界的に著名なイスラーム美術のコレクターで、イスラーム美術に関する著述も多いハリリーに、イスラーム美術ギャラリーの開設を記念してカタログを書くよう、スルタン自身が依頼したのだという³⁵⁾。ハリリーは序文において、ギャラリーには、スルタンの個人コレクションである1500点のイスラーム美術品が展示されており、その特色として当時は珍しかった19世紀のイスラーム美術品の



図3 ブルネイ博物館のイスラーム美術ギャラリー入口
(内部は撮影不可)、筆者撮影

ほか、17-19世紀における東洋と西洋の密接なかわりをうかがわせる作品が含まれていることを挙げている。そして、カタログの出版に際して、コレクションの規模とイスラーム美術の発展の様子を如実に示す作品を選んで収録したと述べている³⁶⁾。

実際にカタログに掲載されている142点のほとんどが、7世紀から19世紀にイラン、イラク、シリア、インド、中央アジア、トルコ、北アフリカで制作された典型的なイスラーム美術品であり、欧米のイスラーム美術館にも収蔵されていることの多いものである。その意味で、地域的特性や独自性は見いだせない。例外は、ムスリムのために制作された明代の陶製パネルと、18世紀にポーランドでサファヴィー朝のものを模倣して制作したサッシュの2点のみである³⁷⁾。ポーランドのサッシュは、メトロポリタン美術館等にも収蔵されているので、カタログに掲載された作品中、特色のあるものは明代の陶製パネル1点のみである。142点は、「写本芸術」「陶器」「金工品」「ガラス」「宝飾品」「コイン」「その他」に分類されて、メディアごとに概説が付されているものの、東南アジアのイスラーム美術に関する言及は一切ない。すなわち、『ブルネイ博物館のイスラーム美術』には、そのタイトルにもかかわらず、東南アジアのムスリムのために制作されたイスラーム美術品としては、明代の陶製パネル1点しか含まれておらず、東南アジアのイスラーム美術に関する言及がほとんど見当たらないのである。

イスラーム美術史は、スペイン、北アフリカ、シリア、トルコ、イラク、イラン、中央アジア、インドを中心とする地域で生成した美術を主たる対象と

してきたため、東南アジアにおけるイスラーム美術というテーマは、まだ十分には研究されていない。そのため、東南アジアのイスラーム美術に関して言及がないからといって、カタログ執筆を依頼されたハリリーを責めることはできないだろう。むしろ問題なのは、なぜ、ブルネイ博物館の学芸員がカタログを執筆しなかったのか、ということである。その原因としては、ギャラリーの開設された1990年当時、イスラーム美術史学を専攻し、東南アジアのイスラーム美術をイスラーム美術史に位置付けて正当に評価できる学芸員が存在しなかったことが考えられる。

4. 現状について

現在、イスラーム美術ギャラリーは、「石油とガス」「自然史」の展示室とともに1階に設置され、2階には「伝統文化」「考古学と歴史」「ブルネイの独立」の展示室がある。しかし、2013年7月にブルネイ博物館を訪れたときには、修復のためか、1階のみが公開されていた。イスラーム美術ギャラリーには、コーラン、陶磁器、宝飾品、コイン、ガラス、金工品、染織品などが、メディアごとに大まかに分類され、まとまりもなく展示されていた。キャプションが不十分なうえにガイドブックやカタログもないという教育的配慮の不備、作品の保存状態の悪さが目立つ。展示されている美術品のなかには、優れたものもあるだけに残念である。博物館のロビーは広いものの、その出版物を取り扱うミュージアム・ショップも存在しない³⁸⁾。

現状からは、1990年にイスラーム美術ギャラリーを開設して以来23年間、ほとんど手を加えていないのだと思われる。先述したように、1990年といえば、スルタン・ハサナル・ボルキアが、「マレー・イスラーム王制」を宣言した年である。それに合わせ、莫大な資金をもとに美術品を買い集め、著名なハリリーに依頼して立派なカタログを制作して、急ごしらえでギャラリーを開設したあとは、放置に近い状態で、イスラーム美術史を専門とする学芸員が加わることもなく、現状にいたったのだろうと考えられる。

このように、イスラーム美術ギャラリーにはあまり手がかけられてないようだが、考古学など、ブルネイ博物館の他のセクションは近年でも収集・研究・出版を行っているようで、2003年にはブルネ

イの墓碑・石碑についてのモノグラフが出されている³⁹⁾。また、2002年と2010年にはブルネイ博物館が収集した金工品のカタログも出版されている⁴⁰⁾。

これらのなかには、イスラーム美術史の観点から興味深いものもあり、ブルネイから出土した、アラビア文字文の付された元代・明代の陶磁器の破片⁴¹⁾と合わせて、ブルネイにおけるイスラーム美術の事例として展示することが可能である。また、イスラーム美術ギャラリーには、他の美術品に紛れて目立たないが、中国で制作されたアラビア語銘文入りの金属製の花瓶やエナメル装飾された香炉セット、イランのカージャー朝宮廷用に作られたヒジュラ暦1297年（西暦1879/1880年）とヒジュラ暦1301年（西暦1883/1884年）の年記入りの中国陶器などがあり、東アジアで作られたイスラーム美術品の事例として興味深い。こうしたものをまとめて展示することで、ブルネイのイスラーム美術展示としての特色を打ち出し、また、イスラーム美術史学の発展そのものにも寄与することができると考えられるが、これらが他のセクションに分類されているということが、ブルネイ博物館におけるイスラーム美術の位置付けを示しているともいえる。

欧米では近年、イギリスのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、アメリカのメトロポリタン美術館、フランスのルーヴル美術館などが次々とイスラーム美術ギャラリーを改修・拡大し、より一層充実したイスラーム美術展示を行っている。ブルネイと同じく、東南アジアに位置するIAMMやACMのイスラーム美術展示は、それらに規模は及ばないものの、欧米で発達したイスラーム美術史学と博物館学の成果を取り入れ、そのうえで東南アジア・東アジアのイスラーム美術にも焦点を当てることで独自性を打ち出しており、特別展を含む展示や出版物を通じての教育・研究活動や設備の面では引けを取っていない⁴²⁾。IAMMやACMに見られる意欲的で水準の高い展示と、現在のブルネイ博物館のイスラーム美術ギャラリーの展示には大きな差が見られる。1965年に組織されたブルネイ博物館は、イギリスの影響の強かった1960年代から1980年代にかけては、東南アジア地域の博物館をリードする存在だったと思われ、また、イスラーム美術専用のギャラリーを設立した時期もIAMMやACMなどと比較しても早い。それがなぜ、現状のようになってしまったのだろうか。

欧米における個人コレクションが、公的な美術館・博物館へと変遷していく過程は、クシトフ・ポミアンをはじめ、多くの研究者によって詳しく研究されている⁴³⁾。歴史をふりかえると、各コレクションの形成過程、美術館・博物館設立の背景や意図などはさまざまであることが分かる。しかし、現在における欧米の美術館・博物館の多くは、実物資料を収集し、収蔵品を保存し、それを活用して調査研究を行うと同時に、一般の人々の啓蒙にも役立つ教育活動をも行うことを目的としている。日本の美術館・博物館も同様の目的のために運営されている。しかし、現在のブルネイ博物館のイスラーム美術ギャラリーからは、教育・研究活動への意欲は感じられない。ブルネイ博物館の草創期には、イギリスで美術館学を学んだ学芸員が活動しており、ブルネイがイギリスの保護領だった影響か、『ブルネイ博物館ジャーナル』の執筆者にも欧米の研究者が少なくなかった。しかし、現在のブルネイには、欧米の研究者はあまりいないようである。先述したように、こうした変化の背景のひとつとしては、サウンダースの指摘する、欧米の学問的方法によって歴史研究を行う人々と、ブルネイとその支配者の名声を高めることも目的の一つとして研究を行うブルネイ人歴史家との間の対立が考えられる。1991年に山下清海氏によって書かれたレポートによれば、ブルネイでは出版物に対して厳しい検閲が行われており、とくにスルタンへの批判に対して最も注意を払っているという⁴⁴⁾。1994年の『ブルネイ博物館ジャーナル』に掲載された論文には、考古学を専門とする研究者がブルネイ博物館には少ないため、外国人研究者や外国の研究所の協力が必要だと書かれているが⁴⁵⁾、現スルタンは学術研究を奨励しないのであろうか。このような状況では、ブルネイの人々と外国人研究者が共同して行う自由な研究活動は今後も難しいままだろう。

おわりに

ブルネイ博物館のイスラーム美術ギャラリーの入口には、そのコレクションがスルタン・ハサナル・ボルキアによるものであることを記したパネルが掲げられている。現状から考えるに、このギャラリーは、研究・教育のために作られたのではなく、現スルタンの権威と富を誇示し、「マレー・イスラーム王制」を掲げるイスラーム国家としてのブルネイを

印象付けるための装置として作られたのだろう。そのため、現スルタンにとっては、買い集めたイスラーム美術品を展示するイスラーム美術ギャラリーが存在すること自体に意義があり、その展示環境の悪さや教育的配慮の不足などは全く問題ではないのだろう。ブルネイほど財政的に豊かな国であれば、イスラーム美術を専攻する学芸員を海外から雇い入れ、自国の学芸員を教育することは容易と思われるが、そうしないのも、イスラーム美術ギャラリーを設置したことが重要で、研究することには価値を見出していないからだと思われる。

ブルネイ博物館とは別に、市内には「イスラーム・ギャラリー」があり、ここにはスルタンが集めた16-20世紀のコランなどの写本をはじめ、キスワや数珠などが展示されている。展示パネルには「このギャラリーには、写本ならびに、イスラームの教えを守る君主のリーダーシップに関連する品々が展示されている」とあり、ここでもやはり、優れたイスラーム君主としてのイメージを形成するために作品が展示されていた。2007年に出版された研究書『ブルネイのテキスタイルとアイデンティティー』によれば、現在のブルネイでは、古くからイスラーム圏で広範囲にわたって行われてきた、君主が布や衣を下賜することで臣下の名誉を称えるヒルアト（名誉の衣）の制度が行われているという⁽⁴⁶⁾。この研究書からは、儀式における伝統的なテキスタイルの使用によって、ブルネイ政府が「マレー・イスラーム王制」を打ち出そうとしていることがわかる。イスラーム美術品が、国家やスルタンの権威付けとして、また「マレー・イスラーム王制」という体制を象徴的に示すものとして使われているのが、現在のブルネイにおけるイスラーム美術展示ではないだろうか。今後、ブルネイがどのような博物館行政をとっていくのか、注目したい。

本稿は平成25年度科学研究費補助金（若手研究B、課題番号25770046）による研究成果の一部である。

注

- (1) 桃木 (2008), pp. 615-616. 木村陸男氏は、天然資源からの国庫収入を福祉に充て、国民の大半を占める公務員を優遇することは、国民の政治参加の要求を弱めるため懐柔策であると述べている。木村 (1985), p. 18.
- (2) Lenzi (2004), pp. 14-17. イスラーム美術は、ムスリムによって作られた美術とムスリムのために作られた美術の両方を指す。イスラーム美術の定義については梶屋

- (2009), pp. 8-9, Bloom and Blair (1997), p. 5 を参照。
- (3) Kamada (2012), Kamada (2013).
- (4) スルタンの系図が彫られた石碑については Sahriffudin and Ibrahim (1998) などを参照。
- (5) Brown (1970).
- (6) Nicholl (2007). この本は1975年の初版後、1990年、2007年に再版されている。1225年から1425年までのブルネイの歴史については Nicholl (1989) を参照。
- (7) Saunders (2006), p. xix を参照。この本は、1994年にオクスフォード大学から出版されたあと、2002年に第2版がラウトレッジ社から出版された。筆者が参照したのは、2006年に出版されたデジタル版である。
- (8) Al-Sufri (1995).
- (9) Sidhu (2010).
- (10) Al-Sufri (1995), pp. 4-6.
- (11) Saunders (2006), p. 14.
- (12) 婆利の位置や中国への朝貢などについては Al-Sufri (1995), pp. 6-9, 31-32. また、中国への朝貢を含むイスラーム化以前のブルネイについては Saunders (2006)、第2章を参照。
- (13) Al-Sufri (1995), pp. 11-12.
- (14) Al-Sufri (1995), p. 17.
- (15) Saunders (2006), pp. 29-30; Al-Sufri (1995), pp. 19-21. この墓のプランや写真については Nicholl (1984) と Suffian (1998) を参照。Kheng (1998), pp. 176-186 には、この墓について1983年12月25日の *Peopl's Daily* (北京) に掲載された記事のほか、関連論文が収録されている。
- (16) Omar and Shariffuddin (1978) を参照。
- (17) Osman (2003) を参照。
- (18) Saunders (2006), pp. 36-37. この墓は、バンダル・スリ・ブガワンの古い墓廟に残っており、その表面には「有宋泉州判院蒲公之墓 景定甲子男應甲立」と彫られている。この墓については Franke and T'ieh-fan (1973)、Osman (1993) を参照。その他、ブルネイへのイスラームの伝播については Al-Sufri (1977) を参照。
- (19) Saunders (2006), pp. 42, 44. 系図については同書、p. 43, fig. 1, Al-Sufri (1995), pp. 52-53 を参照。ブルネイ歴史センターはブルネイとブルネイ王室の歴史記述を目的として1982年に設立された。
- (20) Saunders (2006), pp. 36, 42. アル・スフリによる『ブルネイの古代史』では、ブルネイ初のムスリム君主は、初代スルタン・ムハンマドであるとしている。Al-Sufri (1995), pp. 50, 82 を参照。
- (21) Saunders (2006), p. 48.
- (22) ブルネイ・シェル・グループ社が1992年に出版した『ブルネイ・ガイド (*Brunei Darussalam: A Guide*)』では、スルタン・ボルキアの墓として紹介されているが、サウンダースの記述からは、この墓がスルタン・ボルキアの墓である確証がないことがうかがわれる。Wood (1992), pp. 41-42 と Saunders (2006), p. 40 を参照。
- (23) コタ・バトゥからの出土陶磁とコインについては Harrison (1970) を、コタ・バトゥからの明代陶磁については Pope (1958), pp. 267-270 を参照。
- (24) 1578年にスペインがブルネイを侵略したときに、ブルネイにあった木造5階建てのモスクが焼け落ちたという。スペイン側が記録したモスクの描写については Nicholl (1986) と Carroll (1986) を参照。

- (25) Saunders (2006), p. 69.
- (26) Saunders (2006), pp. 187-188; Sidhu (2010), p. lxxxiv.
- (27) 初期の博物館運営については Shariffuddin (1973) を参照。初期のギャラリーの写真も掲載されている。
- (28) 当時ブルネイ博物館は、イギリスの王立考古学研究所や博物館協会、マレーシアの王立アジア協会とつながりを持っており、初期にはイギリスとの関係が強かったことがうかがわれる。Shariffuddin (1973), p. 51-52, 55 参照。
- (29) Shariffuddin (1973), pp. 52-54.
- (30) Shariffuddin (1970), pp. 1, 3, 6.
- (31) Shariffuddin (1973), p. 54.
- (32) Saber and Orellana (1977), pp. 79, 176-177. この報告書は、1971 年に行われた東南アジアの博物館の発展に関するシンポジウムのために出版された。シンガポール、マレーシア、インドネシア、ブルネイ、マカオ、フィリピンの博物館の運営状況やコレクションについて報告されている。
- (33) Saber and Orellana (1977), pp. 80-85.
- (34) Khalili (1990) を参照。
- (35) Khalili (1990), p. 8.
- (36) Khalili (1990), pp. 10-11.
- (37) 陶製パネルについては Khalili (1990), pp. 98-99、サッシュについては同書、pp. 232-233 を参照。
- (38) ロビーには、多くのスタッフがいたが、イスラーム美術ギャラリーの詳細については知らないと言われ、責任者に取り次がれた。その責任者に、このギャラリーを担当している学芸員は誰なのか、現在どのような方針で展示しているのかを聞いたが、回答を得ることができなかった。
- (39) Salim (2003).
- (40) Brunei Museum (2002) と Brunei Museum (2010).
- (41) Osman (1992), esp. p. 42, fig. 18.
- (42) Kamada (2012), Kamada (2013).
- (43) ポミアン (1992).
- (44) 山下 (1991), p. 66.
- (45) Omar (1994), p. 10.
- (46) Wahsalfelah (2007), p. 60.
- dar Seri Begawan: The Brunei Museum, 2010.
- Carroll (1986): Carroll, John S., "Francisco de Sande's Invasion of Brunei in 1578: An Anonymous Spanish Account," *The Brunei Museum Journal* vol. 6, no. 2 (1986), pp. 47-71.
- Franke and T'ieh-fan (1973): Franke, Wolfgang and Ch'en T'ieh-fan, "A Chinese Tomb Inscription of A.D. 1264, Discovered Recently in Brunei," *The Brunei Museum Journal* vol. 3, no. 1 (1973), pp. 91-99.
- Harrison (1970): Harrison, Barbara, "A Classification of Archaeological Trade Ceramics from Kota Batu, Brunei," *The Brunei Museum Journal* vol. 2, no. 2 (1970), pp. 114-188.
- Kamada (2012): Kamada, Yumiko, "Islamic Art in Southeast Asia: The Significance of the Islamic Arts Museum Malaysia," *Waseda Institute for Advanced Study Research Bulletin* 4 (2012), pp. 85-88.
- Kamada (2013): Kamada, Yumiko, "Islamic Art at the Asian Civilisations Museum, Singapore," *Waseda Institute for Advanced Study Research Bulletin* 5 (2013), pp. 109-115.
- Khalili (1990): Khalili, Nasser D., *A Selection of Islamic Art at the Brunei Museum*, Bandar Seri Begawan: The Brunei Museum, 1990.
- Kheng (1998): Kheng, Cheah Boon ed., *Papers Relating to Brunei*, Kuala Lumpur: Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society, 1998.
- 木村 (1985): 木村陸男「新興国ブルネイの歴史と現実」『アジア研ニュース』55 (1985), pp. 16-19.
- Lenzi (2004): Lenzi, Iola, *Museums of Southeast Asia*, Singapore: Archipelago Press, 2004.
- 梶屋 (2009): 梶屋友子『イスラームの美術—建築・写本芸術・工芸』東京美術、2009.
- 桃木 (2008): 桃木至朗ほか編『東南アジアを知る事典』平凡社、2008.
- Nicholl (1984): Nicholl, Robert, "The Tomb of Maharaja Karna of Brunei at Nanking," *The Brunei Museum Journal* vol. 5, no. 4 (1984), pp. 35-45.
- Nicholl (1986): Nicholl, Robert, "A Note on the Brunei Mosque of 1578," *The Brunei Museum Journal* vol. 6, no. 2 (1986), pp. 44-46.
- Nicholl (1989): Nicholl, Robert, "An Age of Vicissitude Brunei 1225-1425," *The Brunei Museum Journal* vol. 7, no. 1 (1989), pp. 7-21.
- Nicholl (2007): Nicholl, Robert, *European Sources for the History of the Sultanate of Brunei in the Sixteenth Century*, Brunei Museum, 2007 (初版は 1975 年).
- Omar and Shariffuddin (1978): Omar, Metussin bin and P.M. Shariffuddin, "Distribution of Chinese and Siamese Ceramic in Brunei," *The Brunei Museum Journal* vol. 4, no. 2 (1978), pp. 59-66.
- Omar (1994): Omar, Matussin bin, "Archaeology and the Reconstruction of Brunei's Early History," *Brunei Museum Journal* 9 (1994), pp. 1-12.
- Osman (1992): Osman, Karim bin, "A Report of Archeological Excavation and Exploration on Pulau Terindak and Its Surrounding Area," *The Brunei Museum Journal* vol. 7, no. 4 (1992), pp. 18-48.
- Osman (1993): Osman, Karim bin, "Further Notes on a Chinese

参考文献

- Al-Sufri (1977): Al-Sufri, Muhammad Jamil, "Islam in Brunei," *The Brunei Museum Journal* vol. 4, no. 1 (1977), pp. 35-42.
- Al-Sufri (1995): Al-Sufri, Muhammad Jamil 著、鷺見正訳『ブルネイの古代史—古代とイスラム教の発展』(*Tarsilah Brunei: Sejarah Awal dan Perkembangan Islam*), 日本ブルネイ友好協会、1995. (原著は 1990 年にブルネイ文化青年スポーツ省歴史センターより出版)
- Bloom and Blair (1997): Bloom, Jonathan and Sheila Blair, *Islamic Arts*, London: Phaidon, 1997. (ジョナサン・ブルーム、シーラ・ブレア著、梶屋友子訳『イスラーム美術』岩波書店、2001)
- Brown (1970): Brown, Donald E., *Brunei: The Structure and History of a Bruneian Malay Sultanate*, Bandar Seri Begawan: Brunei Museum, 1970.
- Brunei Museum (2002): *Warisan Budaya: Keindahan Bentuk dan Ragam Hias Calapa*, Bandar Seri Begawan: The Brunei Museum, 2002.
- Brunei Museum (2010): *Warisan Budaya: Periuk Tradisi*, Ban-

- Tombstone Inscription of A.D. 1264,” *Brunei Museum Journal* 8 (1993), pp. 1-10.
- Osman (2003): Osman, Karim bin, *Selected Vietnamese Ceramics in the Brunei Museums Collection*, Bandar Seri Begawan: The Brunei Museum, 2003.
- ポミアン (1992) : クシシトフ・ポミアン著、吉田誠・吉田典子訳『コレクション—趣味と好奇心の歴史人類学』平凡社、1992.
- Pope (1958): Pope, John, “Marks on Chinese Ceramics Excavated in Brunei and Sarawak,” *The Sarawak Museum Journal* 8 (1958), pp. 267-272.
- Saber and Orellana (1977): Saber, Mamitua and Dionisio G. Orellana, *Comparative Notes on Museum Exhibits in Singapore, Malaysia, Indonesia, Brunei, Macao, and the Philippines*, Marawi: Mindanao State University, 1977.
- Salim (2003): Salim, Mohamad bin, *Ragam Hias Batu Nisan dan Makam: Satu Pengenalan*, Bandar Seri Begawan: The Brunei Museum, 2003.
- Saunders (2006): Saunders, Grahan, *A History of Brunei*, London and New York: Routledge, 2006.
- Shariffudin (1970): Shariffudin, P.M., “Some Problems of Getting Materials for the Brunei Museum,” *The Brunei Museum Journal* vol. 2, no. 1 (1970), pp. 1-16.
- Shariffudin (1973): Shariffudin, P.M., “Museum Development in Brunei, Borneo 1953-1973,” *The Brunei Museum Journal* vol. 3, no. 1 (1973), pp. 51-61.
- Shariffudin and Ibrahim (1998): Shariffudin, P.M. and Abdul Latif Ibrahim, “Batu Tarsilah: The Genealogical Tablet of the Sultans of Brunei,” in Kheng (1998), pp. 159-167.
- Sidhu (2010): Sidhu, Jatswan S., *Historical Dictionary of Brunei Darussalam*, Plymouth: Scarecrow Press, 2010.
- Suffian (1998): Suffian, Tun Mohamed, “Tomb of ‘The King of Brunei’ in Nanking,” in Kheng (1998), pp. 170-175.
- Wahsalfelah (2007): Wahsalfelah, Siti Norkhalbi, *Textiles and Identity in Brunei Darussalam*, Bangkok: White Lotus, 2007.
- Wood (1992): Wood, Nick, *Brunei Darussalam: A Guide*, Brunei: Brunei Shell Group of Companies, 1992.
- 山下 (1991) : 山下清海 「ブルネイの人と生活—石油と水上集落のイスラム王国」『地理』36-6 (1991), pp. 61-67.